

## 最初で最後の一等賞

今金町立種川小学校

佐々木 朗

運動が不得手な私にとって、運動会、特に徒競走など、ひたすら走る競技は、決して楽しみなものではなかった。親にも「朗は回れ右をしたら、一位になれるのにね。」とよく言われたものだった。

運命のいたずらは、小学校4年生の運動会で起こった。その年の運動会では、「二人三脚」をやることになった。

「ぼくは誰と組むか。」、もっと正確に言えば「ぼくと組んでくれる人はいるか。」であった。学級でどのようにパートナーが決めていったのかは、記憶はないのだが、私は、クラスで足の速さ1、2位を争う福井君と組むことになった。福井君とは家に帰った後も自転車で行き来するけっこう仲のいい友だちだった。

私と組むことになった福井君は、さぞかし、相手が私でがっかりだったとは思いますが、そんな表情もみじんも見せることなく、「朗、がんばろうぜ。」と言ってくれた。

4年生だったぼくは、「福井君に迷惑をかけたら申し訳ない。」の一心で、放課後、家の前の道路で、福井君を誘って、二人三脚の練習をした。

「そーれ、1、2、…」息が合うまで、何日もかかった。しだいに、「1、2、1、2、…」ペースも速くなってきた。大きなかけ声をかけながら、私

の全力で走る速さの近くまで、走れるようになった。自信もついてきた。

運動会当日。私の通っていた函館の小学校は1学年5クラスほどあったので、競技の出番は、多くはなかった。最初の徒競走は、予想通りの結果。二人三脚への期待で、徒競走の結果はどうでもよかった。

いよいよ、二人三脚の競技の番だ。福井君と目が合う。「よし、やるぞ。」ピストルの音でスタートを切った。「1、2、1、2、…」風を切ってどんどん進む。余裕の一着ゴールであった。

福井君と並んで校長先生にいただいた「賞 第1位」と赤いスタンプが押された学習ノートは、今でもはっきりと私の脳裏に残っている。

福井君にとっては、数ある一等賞の一つだったのかもしれないが、私にとっては、後にも先にも運動競技でとった、ただ一つの一等賞の思い出である。

もう45年位も前の遠い昔の話になるが、福井君と肩を組んで練習した夏の日、ついこの間のことのように思い出される。

